



私は日本国籍を持つミックスルーツだけど、ほんの数年前に生まれていたら「日本人」にはなれなかったんです、父方が外国人なので。（日本の国籍法は 84 年まで父親が日本人でないと日本国籍を付与できない“父系血統主義”というレイシズムと家父長制が悪魔合体した激キショールールを採用していたのだ！！） <https://x.com/fujimiyoico/status/1844348613813731423?s=20>

(最終確認：2026/02/18)

これは漫画家、藤見よいこさんの X に書かれた投稿です。『この漫画がすごい！2026』オンナ編 1 位を獲得した『半分姉弟』の作者、藤見さんは自身がミックスルーツの当事者です。ミックスルーツとは複数の国、地域、人種または文化的な背景をルーツに持つ人のこと。日本国内には約 50 人に 1 人の当事者がいます。『半分姉弟』の冒頭には次の言葉が掲げられています。

この作品には、人種や民族に基づく偏見や差別の描写があります。

また、「ハーフ」という呼称に関しては、その意味合いに傷ついてきた当事者の方も多くおり、議論が存在します。

本作品では、このような事実を踏まえた上で、今もなお多くの人が「ハーフ」という呼称を利用している実態を反映させ、また、呼称のもつ「半分」という意味合いを改めて問い直す意図から、あえて使用しています。

ご自身の気持ちと相談して読んでいただくよう、お願いします。

(第 1 話「米山和美マンガダ」p.6)

日本語として流通する「ハーフ」という言葉には不思議なニュアンスが込められています。「混血」「あいのこ」といった言葉は、純粋な日本人である自分を価値づけ、そうでない相手を蔑む視線が感じられるのですが、「ハーフ」には何やら憧れのような気持ちが含まれていないでしょうか。

西洋人とのミックスルーツの子どもが可愛らしい外見をしていたり、英語が日常的に話される環境が想像されたりして、一般的な日本人である自分たちよりも、なにか価値が高い存在のように見える、そのような気持ちです。

もちろん「ハーフ」の人たちはそのような人ばかりではありません。一般的な可愛さの基準から外れる外見をもっていたり、日本語しか話せない人、日本語も親のルーツの言語も十分に身につけていない人も実際にはたくさん存在します。ふたつの言語を自在に活用できる人をバイリンガルというのに対して、この状態にある人をセミリンガルやダブルリミテッドといいます。

『半分姉弟』は、日本で生活するミックスルーツの若者たちの物語です。一話ごとに主人公が変わりますが、タイトルにもなっている姉弟のエピソードが強烈です。

「姉ちゃん、俺、改名したけん。俺、『米山優太』になりました」。喫茶店で免許証を見せる浅黒い肌の弟。同じく浅黒い肌の姉は驚きと怒りで立ち上がり、声をあげる。「はあ!? かいめい…あ、あああんたマンダング取ったとー??」 わたしたち姉弟は母が日本人、父がフランス人――。

(第1話「米山和美マンダング」p.7-8)

日本の戸籍にはミドルネームの記載欄がないため、この姉弟の両親は父親の姓を名前の後につけることにしました。地元の福岡で事務員をしている弟は、「米山優太マンダング」から「米山優太」に改名したと話します。改名それ自体は、家庭裁判所に「名の変更許可」を申し立て、「正当な事由」が認められれば可能です。「正当な事由」とは例えば、性別を連想されやすい名前だが性同一性障害の診断を受けて、反対の性別での社会生活を望んでいる場合や、凶悪犯罪者と同姓同名であるといった生活上の不都合、さらには難解な名前や奇妙な名前であること、通称名の使用歴が長いことなどが含まれます。

ミックスルーツを売りにWebライターをしている姉は「うち、別に今の名前で困ったこととかなかった」と言いますが、弟は小学校の教科書に載っていた「スイミー」の話に姉にします。

「赤い魚の群れに1匹だけ黒い魚がおって、でも黒い魚が自分を活かして、みんなで力を合わせて悪いやつを追い払ってめでたしめでたし…とか」「俺、ガキの頃、あれすっげえ正しい話やっち思っって。黒い魚は誰よりも賢くて誰よりも泳ぐのが早かった。やけん群れの一員として認めてもらえた。めっちゃスポーツできるとか、めっちゃ容姿整っとうとか、めっちゃいいやつ、面白いやつ、嫌な気分、不安にさせんやつ。俺らはなんか特別、群れにとって有用やないと一員にしてもらえんのやと思う」「姉ちゃんは黒い魚やけん、わからん。俺はね、普通になりたいだけなんよ」

(第1話「米山和美マンダング」p.11-15)

彼のいう「普通」とは何でしょうか。日本に生まれ、日本人として普通に生活をしているだけでは、その重みを感じることは難しいと思われれます。本エッセイの筆者である私にも、正確には分かりません。日本社会は同調圧力が強く、「日本人は単一民族」という誤った認識も根強く存在しています。

「普通」の日本人から異物と扱われることがあっても「普通」の日本人として社会に適応したいという彼の気持ちを、簡単に分かることはできません。分かったつもりになるのではなく、分からないことを大切に、相手を傷つけてしまうかもしれないことを自覚する必要があるのだと考えます。

意識していない悪意を指す言葉として「マイクロアグレッション（微細な攻撃）」があります。これは人種、性別、国籍、性的指向などに関する特定の属性を持つ人に対して、悪意なく無自覚に、日常的な会話や態度で偏見を伝え、相手の尊厳を傷つける言動のこと。悪意がないため、加害者側は自覚しにくく、受け手にとってはストレスや疎外感が蓄積される「小さな」そして「日常的な」差別行為です。

「差別」という言葉は強い印象をもたらすので、多くの人が「自分は差別なんてしない」と言います。もちろんのこと、自覚的に差別的な言動をする人は多くありません。しかし差別とは、実は誰もが「してしまう」行為なのだと考えられます。

見た目が外国人に見える人に対して、「日本語、お上手ですね」と言うことがあります。言う側は特に相手を傷つける意図はなく、むしろ親しみの気持ちがあるかもしれません。しかしもし、日本生まれ日本育ちで日本語しか話せないのに外見のせいでよくこう言われるとしたら、自分の外見のせいで周りから常に「あなたは日本人ではない」と突き付けられ続けることになってしまいます。

言う側に悪意がなくても、言われた側はそのたびに傷つき、自分のことを疑わしく感じることにならないでしょうか。また、仮に言われた側が問題を指摘しても、「へえーそんな風に受け取るんだね」「過剰反応だよ」「気にしすぎじゃない？」といった反応をされると、違和感を指摘しようとする意欲をそがれ、結果的に「マイクロアグレッション」は温存されてしまいます。

一般人の日常的な感覚の中にこそ、レイシズム（人種主義）や家父長制、つまり一家の最年長男性が家長として決定権をもち、女性や子どもに対する支配権をもつとする考えを維持する源泉があります。

例えば、地域の自治会で「最近外国人が増えて治安が心配だ」という発言がなされ、誰も止めようとしないことがあります。「批判を言う人だと見られると角が立つ」と黙ってしまう人もいるかもしれません。とりわけ年長の男性の発言を批判することが、難しく感じられないでしょうか。

しかし個別の事例を問題にするのではなく、人の「属性」を「危険」と考える感覚が共有されると、「ある属性を持つ人たちは排除してもよい」という感覚が正当化されてしまいます。また「年長の男性を批判することはいけないこと」といった感覚は、慣習の積み重ねで作られた価値観や態度なので、それ自体に明確な根拠はありません。

こうした場面では、直接的な当事者は指摘しづらい状態におかれます。その場に居あわせた第三者が例えば「先ほどの発言には少し引っかかりを感じました」と表明できれば、少しでも改善されていくと考えます。その場面が終わった後からでも、何もしないよりはいいでしょう。私たち一人ひとりが社会を作っているからです。悪意なく他者を傷つけてしまう可能性を自覚することから、『半分姉弟』たちの状況は少しずつ改善に向かうのではないのでしょうか。

紹介作品：藤見よいこ（2025）『半分姉弟 1』リイド社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に  
改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ [sakotomoya@gmail.com](mailto:sakotomoya@gmail.com)